

✿ 発掘調査の概要

石神遺跡の調査(飛鳥藤原第140次)

「飛鳥は怖い。」

予想もしない遺構や遺物が現れる。そんな調査を何度も経験した研究所の先輩に言われた言葉です。

現地説明会も終わり、いよいよ調査も終盤、と幅の広い南北溝を掘り下げていくと、溝底で杭が頭を出していることに気づきました。

杭は、上から打ち込まれるため、その年代決定が難しいので、調査員泣かせの遺構です。今回の杭列も、先端を尖らせており、当時の地表から打ち込まれたものと考えられます。杭の周囲を掘り下げたところ、溝底より少し下で東西方向に一直線に並ぶことがわかりました。どうやらこの杭は溝が掘られた段階で削られたようです。溝は天武朝～持統朝の時期の木簡をはじめとする遺物を含んでおり、この杭列は7世紀後半以前に打設されたものと考えられます。

この杭列を追っていくと、調査区の西辺で北にほぼ直角に曲がっていくことがわかりました。東側を探すと、今度は杭とあわせて東向きに面をもつ南北の石組が見つかりました。この結果、杭列はコの字状に打設されていることが明らかになったのです。

杭は土留めや柵、石組は溝や池の一部の可能性があり、今回の調査区の東・北方の調査が待たれます。これまでの調査では知られていない遺構であり、その性格や時期の検討が必要です。

杭も石組も、もう数cm掘り下げなかつたら気づかなかつたかもしれません。飛鳥は怖い、という言葉強く感じた調査でした。

(埋蔵文化財センター 金田 明大)



石組と杭列(南東から)